

I 極小未熟児の就学前発達

分担研究者 前川喜平

要約

方法:

全国7施設において、前年度作成した共通プロトコールに従い、平成6年3月小学校入学予定の極小未熟児の就学前発達検査をおこなった。診断はプロトコールに記載されているAxisの基準に従って行なった。なお、学習障害リスク児については、IQが70以上で、動作性IQと言語性IQの差が15以上あったものと、視運動機能障害や、認知障害を認めたものとした。そして、各施設における検査結果をまとめた。

対象: 7施設において、検査したのは239名である。

結果: (表1、2)

表1に各施設における検査結果をAxis 1、2に従って括めた。これをAxis 1、2でまとめたのが表2である。

239名を検査し、脳性麻痺19(7.9%)、不器用20(8.4%)、微細運動障害84(35.1%)、精神遅滞43(17.9%)、境界42(17.5%)、学習障害リスク群78(32.6%)、IQ85以上115名(48.1%)、検査項目に1つも境界、異常を認めない完全に正常68(28.5%)である。

明らかな障害児が約25%、完全に正常が三分の一で残りは境界か、知能が正常でも学習障害リスク群である。

考察:

今回の結果よりすると、CP、MRなどの明らかな障害児が25.9%である。この結果は現在迄に、世界各国の先進国より発表された極小未熟児の発達に関する85英語論文のEscobar(1991)の括めと同様である。すなわち、コホートスタディによると、CPの発生頻度が5.7-9.1%、精神遅滞、CPを含めた明らかな障害児の発生頻度が21.2-33.6%である。我々の結果では、まったく正常が68名(28.5%)と非常に少ないが、これは我々がおこなった検査で境界や異常が1項目もみられなかったものの数で、正常であるものは、約1/3と考えられる。知能正常が64.4%でありながら、まったく正常が28.5%ということは、知能正常群でもテストしてみると視運動機能・認知障害や、運動障害、PIQとVIQの差が15以上あるものが如何に多いかを示すものである。学習障害リスク群は未だ就学していないのでイコール学習障害児とは言えない。今後、これらの子供たちが就学してからのフォローが必要である。

表1. 極小未熟児の就学前発達(全国7施設の検査結果)

	聖マリア病院	日赤医療センター	浜松聖隷	埼玉小児医療センター	女子医大周産期センター	東邦大周産期センター	自治医大NICU	総数	
人数(名)	32	56	36	46	34	12	23	239	
Axis 1	脳性麻痺	3	6	0	5	2	1	2	19(7.9%)
	不器用	3	4	2	5	3	0	3	20(8.4%)
	微細運動障害	10	22	8	21	10	5	8	84(35.1%)
	正常	16	24	26	15	19	6	10	116(48.5%)
Axis 2	精神遅滞	4	13	2	14	5	1	4	43(17.9%)
	境界	7	8	8	8	2	3	6	42(17.5%)
	正常	21	35	26	24	27	8	13	154(64.4%)
学習障害リスク児	11	12	12	17	12	5	9	78(32.6%)	
視聴覚障害	2	0	1	0	1	0	0	4(1.7%)	
完全に正常	12	7	14	12	11	3	9	68(28.5%)	

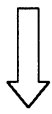
表2. 極小未熟児の就学前発達(全国7施設の括め) 239名

Axis 1 運動障害	Axis 2 精神遅滞
脳性麻痺 19(7.9%)	精神遅滞 43(17.9%)
不器用 20(8.4%)	境界 42(17.5%)
微細運動障害 84(35.1%)	正常 154(64.4%)
正常 116(48.5%)	視・聴覚障害 4(1.7%)
	学習障害リスク児 78(32.6%)
	CP+MR 62(25.9%)
	完全に正常 68(28.5%)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



方法:

全国7施設において、前年度作成した共通プロトコルに従い、平成6年3月小学校入学予定の極小未熟児の就学前発達検査をおこなった。診断はプロトコルに記載されているAxisの基準に従って行なった。なお、学習障害リスク児については、IQが70以上で、動作性IQと言語性IQの差が15以上あったものと、視運動機能障害や、認知障害を認めたものとした。そして、各施設における検査結果をまとめた。

対象:7施設において、検査したのは239名である。

結果:(表1、2)

表1に各施設における検査結果をAxis1、2に従って括めた。これをAxis1、2でまとめたのが表2である。

239名を検査し、脳性麻痺19(7.9%)、不器用20(8.4%)、微細運動障害84(35.1%)、精神遅滞43(17.9%)、境界42(17.5%)、学習障害リスク群78(32.6%)、IQ85以上115名(48.1%)、検査項目に1つも境界、異常を認めない完全に正常68(28.5%)である。

明らかな障害児が約25%、完全に正常が三分の一で残りは境界か、知能が正常でも学習障害リスク群である。